箱庭を制作者の立場に立って理解する試み

－「箱庭－物語法」を用いて －

吉　村　栄　治

Ⅰ　問題

箱庭療法とは，砂の入った箱庭にさまざまな玩具を置いて内面のイメージを表現する心理療法の一つである。箱庭療法について，ドラ・M・カルフ（1972）も強調するように箱庭はセラピストとクライエントとの人間関係（「母と子の一体性」）を母体として生み出された一つの表現として考えられている（河合，1969）。具体的には「自由で保護された空間」を作ることであり，受容的な態度で観察することがセラピストの態度といえる（岡田，1984）。また，箱庭制作を見守るときのセラピストの態度として，解釈などせず，セラピストは何も言わないで，味わい楽しむ態度で，一緒に眺めているだけでよいとの考え方がある（河合1969，東山1994）。その一方で，河合（1969）はセラピストが「言語化を怠るときには，あまりにも感じだけに頼ったり，ひとりよがりになってしまったりする危険性」を挙げ，言語化の必要性についても触れている。

箱庭制作にかかわる言語化に関する研究として例えば，井芹（2013）が大学生を対象に行った箱庭制作後に命名する研究や，楠本（2013）が40代女性を対象に行った箱庭制作後に語り（インタビュー）を行う研究もある。さらに，藤岡・石田（2012）が大学生を対象にした箱庭制作後の言語的やり取りの検討をした研究がある。いずれも言語化を促し，作品を把握するのには役立つが，作品の発展性を制限するなどの課題も残ると述べている。これとは別に，箱庭を理解するための一つの方法として，「箱庭－物語法」（中垣・菅，2016）に着目する。箱庭制作後に制作者が箱庭をもとに物語を作るという方法である。「物語を作ることで，作品をより深く，多様に把握し，理解しようとする」方法であるといわれる（岡田，1993）。「箱庭－物語法」は，もともと心理療法家の感受性やイメージ力，深い理解，自己洞察のための訓練として用いられてきたものである（三木，1992，岡田，1993，東山，1994）。

箱庭を作ることは，一つのイメージ表現であり，「イメージとは意識と無意識の接点に生じてくるものである」（岡田，1984）。また，物語も「無意識と意識の協調によってつくり出されるところに本質があり」，「この両者をつなぐもの」である（河合，2001）。つまり，「箱庭－物語法」において物語を作ることは，箱庭に表現されたイメージを，イメージを残したままの「物語」という形に変換することである。つまり，物語を理解することは箱庭を理解することにつながると思われる。

一方，箱庭に何が表現されるかについて河合（1969）は「『その時に，その人にとって』問題となる面が出やすい」と述べている。また，箱庭作品に制作者の課題が表現された例として，中年期女性の箱庭制作を用いた事例を挙げている（楠本，2013，上田，2016，久米，2015）。杉村（2001）や溝上（2010）らは，女子青年のアイデンティティ探求における関係性の問題を重視した研究の中で，女性の生き方が多様化した現代において，青年期女性のアイデンティティ形成のむつかしさと重要性を指摘している。本研究では，このような青年期後期の女性を対象に制作者が作った箱庭を制作者の立場に立って理解したいと考えている。

Ⅱ　目的

本研究では，「箱庭－物語法」が，見守り手が制作者の箱庭を理解する手助けになるかどうかを調べるために研究を行うことにした。

Ⅲ　方法

調査期間　2018年８月～９月

研究協力者　女子大学生６名

手続き　「箱庭－物語法」の面接を２回実施した。面接においては，箱庭制作後に箱庭の印象を制作者と見守り手が「SD法」でチェックし，そのあといくつかの質問を行う。箱庭の写真を撮り，その画像をもとに後日物語を作ってもらい，物語は１週間後に持参してもらう。物語の分析については，「関係相のカテゴリー」（鈴木，2012）と「TATかかわり分析」（山本，1992）を用いて分析を行った。

Ⅳ　結果・考察

結果は研究協力者ごとに，箱庭は写真で，箱庭の印象はグラフで表記することにした。

1）箱庭理解と箱庭の印象について　制作者と見守り手の印象がほぼ一致した箱庭もあった。これらの箱庭は，制作者が箱庭を作っている最中から，題名のようなものが見守り手の頭に浮かんでくるようで理解しやすいと思われたものであった。逆に，制作者と見守り手の印象が大きく異なる箱庭もあった。これらは見守り手にとって，わかりづらい箱庭であった。「箱庭－物語法」により物語を読むことで見守り手の印象が制作者の印象に近づくこともあるが，近づかないものも多い。ただ，制作者がなぜそのような印象をもったかを理解するには「箱庭－物語法」は役立つと考えられる。

2）物語を読んだ後の箱庭理解について

上記で述べた，制作者と見守り手の印象が大きく異なるいわゆる「分かりにくい箱庭」の場合，物語を読むことで箱庭理解が深まった。ただ，物語がなくても箱庭を見ただけで何となく制作者の意図やイメージが分かるような箱庭もあった。また，箱庭理解の程度は，物語が状況説明に終わっているなど，物語の形式や内容によるところも大きい。

3）心理的課題について

Aさんの場合は，異性と出合うという課題は青年期の発達課題に一致している。ただし，対人関係については，箱庭および物語から鈴木（2012）のいうように人間関係上の問題が推測される。Bさんの場合は，箱庭に置かれた大きな恐竜は河合（1969）のいう「トリックスター」であると考えられる。この恐竜との接触を通して，さらに大きな自我の統合に向かおうとしているようである。Cさんの場合は，わかりづらい箱庭であったが，物語の「TATかかわり分析」から見えてくるものとして，家族からの自立の課題が伺われる。

Ⅴ　総合考察

1）心理臨床学的意味　本研究において，分かりづらい箱庭がいくつか存在した。その際，「箱庭－物語法」は，見守り手が分かりづらい箱庭を理解する一助となった。また，制作者の心理的課題もいくつか浮かび上がってきたことも相手の内面世界を知る手助けとなり，治療的な意味をもつものと考えられる。

2）本研究の限界と今後の課題

本研究では，見守り手が筆者一人だけであったため，制作者が作った箱庭に対する印象が主観的になったことは否めない。制作された箱庭を後で複数の調査者で印象を評価すれば，もっと客観的なデータが得られ，信頼性が増したと考えられる。今後の研究において，複数の見守り手（調査者）によって制作者の箱庭を評価したり，場合によっては見守り手と分析者を分ける配慮も必要になってくると考える。

本研究において，見守り手が制作者と事前に信頼関係を作ることなしで，いきなり調査として箱庭制作をしてもらった。これは，心理治療的とはいえない。今後の課題として，見守り手と制作者との人間関係（「母と子の一体性」と「自由で保護された空間」）を作り，受容的な態度で接するためにも，調査の前に，まず信頼関係を作り，制作者も見守り手も開かれた自分として「*今，ここに*」居ることが大切と考える。

（引用文献）

藤岡美紀・石田弓（2012）．大学生を対象とした箱庭制作後の言語的やり取りの検討―自己理解を促すための質問―．広島大学心理学研究，第12号，197-216.

東山紘久（1994）．箱庭療法の世界．誠信書房.

井芹聖文（2013）．作り手が箱庭作品を命名する体験の検討．心理臨床学研究，31，3，446 - 476.

ドラ・M・カルフ（1972）．カルフ箱庭療法．河合隼雄監訳．誠信書房.

河合隼雄（1969）．箱庭療法入門．誠信書房.

河合隼雄（2001）．「物語る」ことの意義．河合隼雄（編）．心理療法2　心理療法と物語．岩波書店，pp.1-19.

久米禎子（2015）．箱庭の「ピッタリ感」について―「ズレ」と「揺らぎ」の視点を加えて―．箱庭療法学研究，28，1，19-32.

楠本和彦（2013）．箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究．箱庭療法学研究，25，3，3-17.

三木アヤ（1992）．増補自己への道―箱庭療法による内的訓練―．黎明書房.

溝上慎一（2010）．現代青年期の心理学―適応から自己形成の時代へ．有斐閣.

中垣ますみ・菅佐和子（2016）．「箱庭－物語法」（サンドプレイ－ドラマ法）による自己探求の試み1－成人男性の事例を通して－．京都橘大学心理相談研究，第2号，69-76

岡田康伸（1984）．箱庭療法の基礎．誠信書房.

岡田康伸（1993）．箱庭療法の展開．誠信書房.

杉村和美（2001）.関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因．発達心理学研究，12，2，87-98.

鈴木睦夫（2012）．絵解き法（TAT）のすすめ―新たな分析・解釈法の導入．中央大学　心理学研究科・心理学部紀要，第12号第1巻，11-159.

上田琢也（2016）．心理療法における「眺め」の意識．心理臨床学研究，34，1，83-94.

山本和郎（1992）．心理検査TATかかわり分析―豊かな人間理解の方法―．東京大学出版会.